



大阪で発行されているアナキストの新聞「自由連合」に、右のようなく特別号の発行企画が載っていた。(同誌35号)。



私 R.R. が個人責任で週刊三文評論を発行し、私個人の勝手・好みでそれを送りつける、というのには、ヤミクモに(売名的に)送っているように思われ、実は、そうではないのだ。つまり、私 R.R. が書いたもの(つまり週刊三文評論)を読んで欲しい、というその人に私は送りつけているのだ。(送られた人は、迷惑かも知れないが)。だから、この「自連く特別号」のように、直接、誰に送ったのか不明なような形態での配布は、私 R.R. は好まないのだ。これが、「自連く特別号」への参加を私がためらった主な理由だ。



しかし、「自由連合」は、私の尊敬する向井孝さんや黒川遼君たちの出している新聞である。その新聞のく特別号の発行企画が判明した以上、それに乗っかってみたい気がしたのだ。吳越同舟かも知れない。が、「吳越同舟」は、もともと週刊三文評論の得手とするところなのだ。とにかく、乗船させてもらうつもりだ。

### 三文評論読書会へのお誘い

読者は万人によって定められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。今や知識と美とを特権階級の専横より奪い返すことはついに庶民の切実なる要求である。

毎月1回、読書会を開いていますので、御参加頂ければ幸いです。直接御出席下さっても、通信で御参加下さっても、どちらでもかまいません。貴方の御都合のよいようになさってください。

テキスト: 34月5日、同一の本を貸して下さいます。

直接御出席のばあい(下記へおいで下さい)

1. と き: お問い合わせあれば、お知らせします。

(通例は) 毎月第1土曜日午後1時半より4時半までです。

2. と こ ろ: お問い合わせあれば、お知らせします。

会合は、通例、自己紹介→読書会あての手紙や読後感想文の朗読→テキストについて話し合い→雑談、の順で出席者全員に発言してもらっています。時には、自己紹介→雑談、だけのこともあります。会場費は不要ですが、御寄付頂ければ幸いです。

通信で御参加のばあい(返信アンケートへの御回答は、必ず、週刊三文評論に載せて下さい。)

遠方にお住いか当日ちょうど都合が悪いとかその他の理由とかで、読書に間に合いませんが御出席頂けない場合は、通信で御参加下さい。その場合は、上記のテキスト(または最近あなたが読まれた本)について、読後感想文を400字詰原稿用紙5枚以内にまとめて「長野郵便局私書箱41号、岩波文庫読書会係」あてに送って下さい。毎月の定例会合のさいに読み上げ、適当と認められれば、私どもの発行している雑誌「三文評論」に掲載します。(原稿料はお支払いしておりませんので、御了承下さい)。なお、此の雑誌を欲しい人は、その旨お申し送り下さい。(1部500円前後です)。

問い合わせ(回答には返信を御利用下さい)

1. 此の読書会の通知を差上げた方がよいような、貴方の友人を御紹介下さい。なるべく沢山の貴方の参加を促す、充実した読書会にしたいのです。
2. 次回にはテキストとして何を取り上げたいか、貴方が御希望下さい。読者を愛好する人々の意向にそって、会を運営してゆきたいのです。



それで、週刊三文評論の、此の号(No.271)は、11つもより500部余計に刷って、それを自連大阪に送る。

今迄、私 R.R. から直接週刊三文評論を送っていた以外の人たちに、自由連合を媒体として、此の週刊三文評論が届き、その人達からの応答が得られたら、それほど嬉しいことはない。おカネも無いくせに、返信料金を取人私を利用してはいるのも、貴方からの応答を得たからなのだ。

1972年2月85日。R.R.

「三文評論」の今回の会合は貴方をキーとするためのものでもなく、「思想的にカク」するものでもありません。気楽に自由な(どちらかと言うと、なまぬるい)話し合いの場です。参加しても何も損はないかも知れませんので、あんまり御期待なさらないで下さい。読書会運営費として、1000円以内の(カンパ)を添えて下さい。送って下さった方には、引き換え、113 113 お送りします。他にもっと重要な仕事があるとお考えの方、そうではなくても何となく気楽にしない方は此の呼び掛けを無視して下さい。郵便振替「長野 164 番 三文評論」へ郵便局で払込んで下さると幸いです。

今迄は、上のようお願ひしていましたが、1000円カンパは、113 113 と考えますので、今後は次の「D」内のようにして下さい。Dは、貴方の同人誌、個人誌、サークル誌のために、貴方個人の研究、或は運動のために、貴方のカネをつぎ込んで下さい。そして、その産物を「三文評論」に寄附して下さい。か、通信参加の形で研究成果をお知らせ下さい。1971.11.15

## 週刊三文評論

さんもん ひょうろん

三文評論 Sanmon Hyouron

長野中央郵便局 私書箱 41号 Japan



東天紅の個人責任で発行している週刊三文評論は、現在大変な週刊状態を、まことに済みません。でも、週刊とは言え、週刊のペースで発行しますので、どうか御了承下さい。

此の号の(名目上の)発行日 昭和四七年四月七日  
原稿を印刷所に渡した昭和四七年四月五日

271



「三文評論」は、かつては、同人雑誌だった。それが、113 113 なことから、やがてゆけなくなり、今は、私 R.R. = 東天紅が個人責任で発行を継続している。「個人責任」というのは、「個人誌」として、というのでは、やがて、エッセイが、ちがう。113 113 は、「同人誌の一時あつかりの形」ということから、将来再び同人組織に戻す、という含みがある。事実、週刊三文評論のような「通信」形式のものならば、個人責任で、個人の費用負担でも発行を継続できる。しかし、雑誌ともなると、それはゆけな。事前に分担金額を決めて、それは執筆者に負担して貰うという保証が無くて発行しかねる。「自発性によるカンパ」と言っても、アタリにはな。企画が立たないのだ。それは、今迄の私の経験が私に苦い教訓を与えてくれた。



「組織」というコトバは非常に多義的で、論者相互にハナレが通じ合わな113 113 が多い。ここでも、話が通じ合わな113 113 危殆を覚悟して、話を出す。



「自由連合」という組織論は、その組織(?)の構成メンバー(?)の間に共通の問題意識が無くては、実現不可能なのではないか、と私は考へる。「会員制」の組織論(これを、私は自由連合組織論と対比させているのだ)が、あるのは、「会員になる」という誓約が「共通の問題意識」を代行してしまうので、形式的には問題がない。しかし、「代行」という点で、実質的な問題が生じてくる。



「自由連合」論による組織のあり、実体的なある事業を代行しようとすると、努力が「サ」では、当然欠落が出てくるので、その前後に「共通の問題意識」を掘り起し、再確認する作業が「不可欠」と私は考へる。「自由連合」とは、好き者同友が集って、好きなことをやるのとは、わけが「ちがう」。それから、此の「共通の問題意識」の掘り起し・再確認という作業は、(狭義の)構成メンバーの間だけでなく、自由に連合し・離散する「自由連合」組織の予備軍ともなり得る人々の間にまで範囲をひろげて、為されねばならぬ。

以上は、私 R.R. の 昭和四七年四月四日 現在における見解である。

